

金峰山での転落事故と怪我人搬出

藤井 諭

5月29日、30日にツアー登山で金峰山と瑞牆山に登ってきた。好天に恵まれて予定通り両方の山頂に立て、残雪の富士山、南アルプス、北アルプスなどの大展望を楽しむことができた。その登山の様子は、ホームページのトピックスで紹介しているのでご覧いただきたい。

ここでは、金峰山の下山中に出会った転落事故とケガ人搬出について述べる。場所は大日岩を通過してしばらく下った地点だった。我々が下っていると、若い女性が停止して必死に携帯電話で話している。どうも119番電話らしく緊迫している。



追い越してしばらく行くと、大勢の登山者集団に追いついた。驚いたことに担架で人を運んでおり、ケガ人はまだ若い女性である。右足にケガをしたようで、ストックで固定されている。担架は2mの太い竹竿に網ネットを張ったしっかりしたもので、4人ずつ両サイドで8人の男性が支えている。その後ろに補助の若い女性が一人、運搬者のストックをまとめて持って付いている。思ったより早いスピードで掛け声をかけながら降りていく。時々怪我人が痛がった時と、運搬者が位置を交代する時は立ち止まりながら、速度を保って着実に降りて行った。何か手伝いをしたかったが、残念ながら私はツアー登山のためガイドの指示に従うしかなく、搬出に参加することはできなかった。

同行のガイドからの情報によると、大日岩を通過してホッとしたりした所（地図の○）で気がゆるみ、崖から転落し右足を骨折したとのこと。足がブラブラ状態になり動けなくなったが、ここは森林帯のためヘリコプターでの救助ができない。そこで付近にいた互いに知らない登山者同士が集まり、9人のわか救助隊が出来たようだ。2人は中年男性、6人が若い男性、そして補助の1人の女性だった。担架は下の富士見平小屋から借りてきたそうだ。

我々は途中で追い越して富士見平小屋へ下り休憩していたが、5分後にケガ人は無事下ろされて来た。平らなテーブルに担架を無事に降ろし、救助隊の9人は互いにヤッタ！という歓声を上げながら、互いに握手しハグし合っていた。怪我の女性は安心したのか、涙を流して「ありがとうございます。」と感謝の言葉を繰り返していた。それは感動的なシーンだった。このあと、富士見平小屋から組立式のジュラルミン製担架が使われ、救急車の待つ下の瑞牆山荘まで下ろされていった。救助隊の男性8人と女性1人は、同行者の若い女性から「お礼をしたいから連絡先を」と言われたが、「そういうつもりで行動していないから」と言い、其々かっこよく別れていった。

経過の話は以上だが、いろいろと考えさせられたことを述べてみたい。まず、ツアー登山の縛りで、自分たちが救助の手伝いできなかったことは残念だった。ただ、応急処置の様子を見たら、テーピングがされていないのが気になった。ストックをタオルで固定しているだけで、これではケガ人が痛がるわけだ。テープは登山の必需品である。また、同行者は119番で救助を要請したが、その受けは甲府にしかないと遠く、救急車の手配に時間がかかった。富士見平小屋管理人によると、110番だと

最寄りの警察署に繋がり救急作業がスムーズに行くとのこと。また、けが人は運搬中に痛みを伴うため、痛み止めの薬を持っていたほうが良い。

気になったのは、同行者が救助隊の連絡先を聞き出さなかったこと。指揮を取った富士見平小屋を始め助けてもらった全ての人に、必ず後でお礼をする必要がある。好意に甘えてはいけない。高額な事後処理のためには、あらかじめ山岳遭難保険に入っていることが重要である。

最後に、大怪我をした女性はまだ若いので元通りに回復され、これに懲りることなく日頃から安全を心がけ、登山を続けて行かれることを期待したい。